

特集：包摂性をめぐる都市・地域変容のリアリティ

——外国人の定着とセーフティネットの現場から——

水内 俊雄*

Toshio MIZUUCHI

The Reality of Urban and Community Transformation Regarding Inclusivity:
From the Field of Settling Foreigners in Japan and Operating Safety Nets

特集に至った経緯

本特集は、水内が代表者となっている二つの科研と、それぞれの分担者や研究協力者が代表者としてお持ちの科研成果の合作物であることをまずお断りしておく。本誌の母体である地理思想科研の遺伝子の継承という点では、やや偏った分野になっているくらいはあるが、その点はお許しいただきたい。

水内の科研基盤Bは、2001年からの東アジアのホームレス調査科研に端を発している。2000年代は科研の海外調査にふさわしく、ソウル、香港、台北を中心に何度もフィールドワークを繰り返していた。この東アジアのホームレスの調査は、比較的小人数の分担者により、海外調査として基盤A、基盤Bの科研で進めてきた。と同時に2010年代になって、派遣村以降の不安定居住層の増大により、国内の生活困窮者へのセーフティネットづくりのバックデータづくりにも関わるようになった。国内のホームレス状態の解明にあたるかなり大規模な調査を民間団体の助成や厚労省の補助金事業を通じて、NPOホームレス支援全国ネットワーク等が牽引した。その調査委員長を毎年つとめることになり、多くの現場に接することになった。そこでの知見で、科研向け調査ネタを見出し、単独で挑戦的萌芽での科研を連続的に進めることになった。

2018年度からは、大きい方の基盤Bで、東アジア調査から少々飛躍して、分担者も増やす形で、欧米の都市論との架橋も視野に入れた科研を進める形に転換した。その成果は、水内が所属していた都市研究プラザの共同利用・共同研究機関の公募事業と結びつけ、複数の共同調査チームを立て、ブックレット(URP先端的都市研究シリーズ)という形で毎年発信してきた。そして、2021年度から基盤研究B「生活困窮者自立支援の実践に見る社会包摂原理の日本的受容に関する学際的探究」(代表水内+分担者13名)、および2022年度からの挑戦的萌芽研究「モバイ

ルな就労と居住による非政策的セーフティネット形成と暫居・共居の可能性探求」(代表水内+分担者4名)において、分担者も増える強力布陣となった。しかしコロナ禍もあり分担者と十全に共同調査体制をとることができていないジレンマも抱えることになった。

昨年度までは以上のURPのブックレットを成果とする科研分担者の一部と進めた共同調査体制が機能していたとは言え、分担者同士の意思疎通が十分であるとは言い難かった。今年度は水内の定年退職により文学研究科にもどったこともあり、とにかく分担者のみなさんにもれなく成果を発表していただくという方式を取ることにしてみた。それを、水内が中心となって編集してきた「空間・社会・地理思想」誌で実現することにした。年度末1月下旬の遠隔会議にて急遽それを無理を承知の上で提案した。ご多忙な中、執筆のご協力をいただいたこと厚くお礼申し上げます。

構成について

結果として代表と両科研分担者14名(重複あり)、院生を含む研究協力者7名の協力を得て、24本の寄稿を得ることができた。当初は1本の論文として、章立て構成を提案したが、ボリューム的に本格論考に近い寄稿も得たので、独立章として構成することにし、表1のように3部構成をとることにした。

この3部構成については、基盤Bの関心は直前の科研タイトルが「分極化する都市空間におけるレジリエントな地域再成と包容力ある都市論の構想」であり、多分に都市論を意識していたが、それはⅢ部に反映されている。生々しい現実の都市空間でも本研究が扱う変化の激しい、あるいは問題含みなエッジ空間を実証的に、時には理論的にえぐっていただいている。この関心が日本の「外国人」というとこ

* 大阪公立大学

ろに展開したのが、I部である。またII部は、日本の社会包摂を問う現時点での科研基盤Bと、モバイルな就労、モバイルなハウジングという新しいタームで、従来の公的セーフティネットに加え、民間の提供するさまざまな就労やハウジングをベースにした非制度的セーフティネットのありようも追究する、挑戦的萌芽研究の関心が披露されている。

私事ではあるが、定年退職後1年を経ようとしているが、昨年4月より大阪市西成区にある西成労働福祉センターで非常勤職員を勤めている。外国人への職業紹介や「特定技能」の在留資格を持たれた方へのサポートサービス開発の任に就いている。関連業界への「営業活動」に携わりながら、アカデミズムとは異なる世界から都市・地域のエッジを見ることになった。今後も共同調査から明らかにしていく新たな

な第一歩として、引き続き関心をもっていただければ幸いである。

注

- 1) この関心は、東アジアのホームレス調査の系譜も引いて、次の英文書籍で展開されている。今回の分担者や東アジアや欧米からの研究協力者の参画を得て、コロナトウスキさん中心に編集し発刊したので、参照いただきたい。Toshio Mizuuchi, Geerhardt Kornatowski, Taku Fukumo-
to eds., *Diversity of Urban Inclusivity: Perspectives Beyond Gentrification in Advanced City-Regions*, Springer, 2023.

表1 本特集の構成

特集：包摂性をめぐる都市・地域変容のリアリティ——外国人の定着とセーフティネットの現場から——			
0 水内俊雄 特集の紹介			
I部	外国人の日本への定着の現場から	II部	ハウジング/就労/生活支援から見る包摂性の諸相
I-1	水内俊雄・野村侑平 外国人の就労・定着の多様化の実態と地理的統計分析	II-1	垣田裕介 伴走型支援の視点で生活困窮者の就労と社会的孤立を捉える
I-2	福本 拓 地域労働市場における外国人労働者の階層化の徴候——三重県北勢地域を事例に——	II-2	後藤広史 ホームレス自立支援センターから就労自立した人々の仕事に対する意識と就労状況
I-3	コロナトウスキ・ヒュラルド 都市地域における外国人生活者の社会的インフラに関する一考察	II-3	西岡正次 自治体・地域をベースにした就労支援の現状——就労支援に対応する仕事情報の作成と活用へ——
I-4	小関隆志 外国人労働者の金融包摂と金融教育	II-4	稲月 正 生活支援付き住宅の仕組みと効果——NPO法人抱樸の事例から
I-5	宋 弘揚 中国の「対外務務合作」の動向を読み解く——日本を中心に——	II-5	キーナー・ヨハネス ウィーン市のホームレス支援の改革と恒常支援付き居住の現状
I-6	朱 澤川 近年の中国人が日本の不動産に投資する要因と情報入手の方法	II-6	菅野 拓 社会保障における社会ネットワークの政策的な利用に関する一考察
I-7	陸 麗君 中国系住民を対象とする有効な調査方法——質問紙調査から考える	II-7	武岡 暢 「福祉の敗北」とスティグマ
I-8	千川はるかほか 中国人ニューカマーによるビジネスの地理的集中と新たな展開——大阪ミナミとその周辺を事例として——	II-8	西野雄一郎ほか 林産業と福祉の連携によるレジリエントな中山間地域の賦活と経済循環の可能性の追求——モバイルな就労・居住に着目して
III部	都市変容のエッジ空間の過去といま		
III-1	五石敏路 コロナの感染率および死亡率の要因に関する予備的考察	III-2	蕭耕偉郎 コロナ禍に伴うエスニックタウンの空間変容：横浜中華街と大阪コリアタウンに着目して
III-3	野村侑平 東京大都市圏における外国人人口の動向と地域の現況——埼玉県川口市を中心に	III-4	松尾卓磨 現代京都の周縁/周辺のエッジ空間における都市再編過程：京都都市論のための試論
III-5	水野阿修羅 寄せ場の消滅はふせげるか？そしてドヤ街は？	III-6	イップ・モーリス 都市変容の法地理学
III-7	スマート・アラン 人類学からみたグレーの色階調：インフォーマルな規範と(非)合法的なものになること	III-8	スマート・アラン 植民地時代の香港におけるインフォーマリティーのフォーマル化：スクワッティング、立ち退き、ジェントリフィケーション